The Bulletin of Toyohashi Junior College
1996, No. 13, 77-86

原　著

Philip M. Taylorの*Confessions of a Thug*について

小　西　真　弓

序

18世紀から19世紀にかけて，本格的に植民地化が進められたインドの歴史や風土に関する文献や資料がイギリス国内で数多く出版された．それらの多くは植民地支配に携わった行政官や軍人あるいはミッショナリーが著したもので，ヨーロッパ中心主義的な偏向が目立つせいか，今日あまり学問的な対象として顧みられない．しかし中には，独自のインド観が展開されているEdmund BurkeやJames Millの著作のように，イギリス本国の支配層の間に様々な論議を呼び起こしたものもあった.[1] ヒンドゥーやイスラム世界の現実を伝える書物は，植民地行政に携わる人々のインド観を新たにし，植民地支配の方針を決定するための貴重な資料にもなった．もっとも当時のイギリスに於けるインド研究は，政治・経済的利害の絡んだもので，知識人の中でも東洋の宗教や文化に学問的な興味を抱いたのは，ヴィクトリア朝中期に至ってもごく少数だった．新聞や雑誌は原住民の世界そのものよりも，同胞の植民地での活躍ぶりや苦難を中心に報道し，フィクションの中でもインドはイギリス人のためのロマンスの地として描かれることが多く，インド人が舞台の中央に置かれることは稀だった．このような風潮の中で1839年に出版されたPhilip Meadows Taylor（1808-1876）の*Confessions of a Thug*（『サグ団員の告白』）は，当時としては珍しく原住民を主人公としてインドの様々な局面を描き出した興味深い作品である．文学作品としては少々荒削りで芸術性に欠けるものの，インドの暗殺教団員，サグ（Thug）の実態に基づいて執筆されたその真に迫る内容が，多数の読者を獲得したと言われている.[2] なるほど現在ではあまり研究の対象にされないが，ヴィクトリア朝初期の社会に強い衝撃を与えたこの小説は当時のインドの暗黒面ばかりではなく，イギリス側の知的風土を考察する上でも，一読に値する作品である．

I

*Confessions of a Thug*は，1830年代にインドのサーガル付近で捕えられた悪名高いサグのAmir Aliというインド人が，イギリスの官憲に罪を認めて自らの過去を語るという形式で物語が展開されている．Amirを指す‘Thug’とはサンスクリット語‘Sthag’（騙す）から派生し，ヒンドゥー語を経て英語化した言葉であるが，元来，中・近世の北インドからデカン高原地方で，親密さを装って近づいた旅人をハンカチーフまたは輪なわのようなもので絞殺し，その金品を奪った強盗団を意味する．その起源や実態については不明な点も多いが，一般的には彼らはヒンドゥー教の破壊神Kaliを崇拝し，その教えに従って悪事を為したと言われている．しかし意外にもサグの中にはAmir Aliのように，敬けんなイスラム教徒もいれば，町や村の行政を司る社会的身分の高い者もいた．無数の旅人が犠牲になったにもかかわら

＊テキストには，Philip Meadows Taylor: *Confessions of a Thug* (1837 ; rpt. London : W & J Mackay, 1974) を使用した．本文中の括弧内の頁数はすべてこのリプリント版によっている．

1) Geoge D. Bearce, *British Attitudes towards India 1784-1858* (1961; rpt. Westport : Green Wood Press, 1982), 14-20; 65-78 参照.

2) Udayon Misra, *The Raj in Fiction: A Study of Nineteenth-Century British Attitudes towards India* (Delhi : B. R. Publishin Co., 1987), 67 参照.

ず，何年もサグが野放しにされていた原因としては，インドの治安組織の不備や旅人が行方不明になっても不思議ではない厳しい自然環境，さらに迷信深いインド人たちが神がかり的な彼らを罰して災いがふりかかるのを恐れたこと等が考えられる．また中には貢ぎ物を目当てにサグを庇護した為政者もあって，彼らは19世紀前半だけでも，100万人以上の旅人を暗殺したと言われている．しかしインド社会の暗黒にはびこるサグが，ピンダーリー（Pindaris）に劣らず植民地経営にとって大きな障害であることを認識し始めたイギリスの支配層は，1829年に「サグとダコイツ局（Thugee and Dacoity Department）を設置し彼らの取締りに乗り出した．一味はことに1831年から1837年にかけてBentinck総督の命を受けたW. Sleemanによって徹底的に弾圧され，その実態が暴かれた．この間にイギリス当局によってサグとして捕らえられた3,200人以上が処罰されたが，一部の者は減刑を条件に犯罪のすべてを供述して仲間を告発する‘approver’となって取締りに協力し，彼らによる被害は激減したと言われている．[3)]

Sleemanが活躍した頃，ハイデラバードのNizamの配下であったTaylorは，しばらくの間Bolarumの警察長官としてサグの取締に従事した．[4)] *Confessions of a Thug*はその時の体験や，彼らの半宗教的な犯罪に関する報告書を基にして執筆された作品で，主人公らの犯罪手口や狂信ぶりは，捕らえられたサグの供述の内容に符合している．[5)] しかしこの小説は，一人称語りの単なる犯罪小説でなく，歴史小説として評価できるほど，物語の中では，様々な登場人物を通して歴史上の事件や人物が言及されたり，インド各地の風物が紹介されている．生々しいサグの実態ばかりではなく，彼らの背景にある社会や宗教を描き出しているこの作品は，G.D.Bearceが指摘するように，[6)] フィクションとはいえ，Sleemanらが執筆した研究書よりもヴィクトリア朝初期の読者にインドの現実を認識させるきっかけになったように思われる．

II

700人以上の旅人を手にかけた悪名高いサグのAmir Aliは，裕福なパターン人の長男として生まれるが，物心つき始める頃にインドールへの道中でIsmail Aliを中心とするサグ団に襲われ，両親を失う．幼い彼も母親を手にかけたサグのGaneshaに殺されかかるが，彼を養子に望んだIsmailによって一命をとりとめ，表向きは布の商いを職業とするAli夫妻の一人息子として引き取られる．その後，実の両親の悲惨な最期の記憶が定かでなかったAmirは，夫がサグであることを知らない養母と家庭では優しいIsmailの愛情を一身に受け二人を実の親と思い込むほど幸せな日々を送る．そんな彼が人生の転機を迎えるのは，養父にサグであることを打ち明けられた18歳の年であった．サグの残虐性を知らないAmirはその犯罪行為を次のように正当化するIsmailに感化されて彼の仲間になる決心を固めていく：

> ヒンドゥーの教えによれば，この世の初めに，至高なる存在から発せられた創造する神と破壊する神があった．ところが創造する神がこの世界にあまりにも早く人々を住まわせてしまったので，破壊する神は創造する神に歩調を合わせることができなくなってしまったし，また合わせることを許されもしなかった．しかし破壊する神は，彼の目的を遂げるためにあ

3) *Encyclopedia of World Cultures*, ed. Paul Hockings (Boston : G. K. Hall & Co., 1920), III, 294参照.
4) Philip Meadows Taylorの伝記的事項についてはBrian Rawson,‘Introduction’in Taylor, *Confessions of a Thug*, (1837 ; rpt., London : W & J Mackay, 1974) 7-9を参考にした.
5) Charles Trevelyan,“The Thugs; or, Secret Murderers of India.”*Edinburgh Review* 64 (1837): 191-207参照.
6) Bearce, *op. cit*., 259-60.

らゆる手段を採ることを許された．中でもKaliやBhowaniとか他の多くの名前で知られている彼の妻Deviは，この機会に彼女が創造した像に生命の息吹を吹き込めるようになった．これが実現されるやいなや，彼女はサグと名付けた多くの信奉者を集め，その効力を試すために自らの手によつてサグたちの前で，彼女の造った像を破壊した．その方法を現在の我々が実行している．彼女は人間たちを破滅に誘い込むために，サグに優れた知性とずる賢さを授けて彼らをこの世に送り込んだ，そしてサグにその働きの報酬として，彼らが死に追いやった人々から略奪できるものを与えた．（37-38）

Ismailのこの天地創造説は一般的なサグの信仰と少々異なるが，[7] Kali神がこの世の創造に協力したサグに報酬として，彼女が造った人間を絞殺してその所持品を奪う権利を与えたという説はサグ一般に共通する概念であった．つまり彼らにしてみれば，事前に自然現象による占いで，Kali神の意向に沿うことを確認すれば，道中で出会った旅人を暗殺してその金品を奪うことは，いわば一種の宗教儀式で犯罪ではない．故に彼らには罪の意識や後悔というものがなく，サグとしての技量や手がけた犠牲者の数は自慢の種になった．

III

養父の期待に答えるためとはいえ，ごく普通の少年として育ったAmirが，サグ稼業を天職として受け入れるまでにはやはり心理的な問題や様々な試練を乗り越えなければならなかった．まず第一に，幼い時からイスラム学者（mullah）のもとに勉学に通ってコーランに親しんだ彼には，イスラム教徒の養父が何故，ヒンドゥーの神の僕であるサグとして暗躍するのか疑問であった．彼同様，Ismailにとってさえ，イスラムの教えは日常生活の規範であり，一日に5回の祈りやラマダンの断食は無視できない行事だった．養父やイスラム教徒のサグ仲間がヒンドゥーの祭ダシェーラー（Dussehra）を「仕事始め」として祝う慣習は，正に両信徒間のサグの結束を象徴するものであったが，Amirには奇異に感じられた：

ダシェーラーの日に軍隊や，我々サグによっても同様にあらゆる偉大な事業が始められる．なぜなら雨季の中断は，我々に雨によって冒険が妨げられることがないという希望をもたらしてくれるから…　それは我々の庇護者で女神のBhowaniにとって，特に神聖な日だ．しかしそれでも，私はイスラム教徒なので，どうしてそんなにダシェーラーの祭に敬意が払われるのか，そもそもなぜその祭を祝うのか理解できなかった．私はその件に関する私の疑問を解いてくれるように父に尋てみた．（36）

Allahの他に神はいないはずのイスラム教徒がヒンドゥー教徒と共にKali神に仕えるのは，正に異端であるように思われるが，イギリス当局にその点を追求されたサグの中には，KaliがAliの妻，即ちMohammedの娘であると主張して，両信徒間の結びつきを正当化しようとした者さえいたと言われている．無論そのような論拠のない説は，

7)　サグは一般的に次の様な起源説を信じていたとされる：
この世の初めにRakut Beej Danaという名の悪魔が出没して，形作られたり生み出される人間たちを度々食べてしまった．そこで人間をこの世界に住まわせるために，Kali神はこの悪魔を殺そうと決心した…
Kali神は彼を襲って切り倒したが，彼が流した血の滴から次々に新たな悪魔が現れ，彼女がこの戦いに疲れてしまうまでに，その数は，幾何学的な割合で増えてしまった．そのため彼女は片方の腕から拭った汗によって二人の人間を作り，地面に血を一滴も流さずにこれらの悪魔を殺すように命じてハンカチーフを渡した．二人はその仕事を終えた後，使ったハンカチーフを女神に返そうとしたが，彼女は彼らの子孫が生きていくための糧を得るための商売道具としてそれを保存し，二人がそのハンカチーフで悪魔を絞殺したように人間を絞め殺して略奪品を得て生きていくように望んだ…　Trevelyan, *op. cit.*, 199.

イスラム教徒のサグ行為を正当化する口実にすぎず，イギリスの官憲を驚嘆させるばかりであった．しかし現実には中世以来，インドに浸透したイスラム教と土着のヒンドゥー教は対立するばかりではなく，文化や思想面で融合する現象を表してきた．Kali と Ali の結婚はありえなかったにしても，ムガール宮廷の高位高官の中にはヒンドゥーの名門の息女を妻にしたものもあると言われる．また同じ村に住む両信徒がそれぞれ祭日を共に祝うのもそれほど珍しい風景ではないようである.[8] 犯罪行為とはいうものの，そのような文化的背景や19世紀前半のインドの政情不安を考慮すれば，既成の宗教や社会的地位，民族を越えた「兄弟愛」を標榜とするサグに，インド人が入信してしまうのも不思議ではないのかもしれない．Ismail にしてもなぜイスラム教徒とヒンドゥー教徒が宗教的に結びつくのか Amir に「その難題が解けるとは主張できない」(36) と述べる一方で，「ヒンドゥー教は，イスラム教よりも古く，確かに神聖な起源をもつ．そのすべての儀礼や職業に参加しなければ，ヒンドゥー教徒の反感を買わずに真の信仰者が従うことのできる多くの点がある」(37) と認める．無垢な少年をサグに誘い込む彼の言葉は，イギリスの読者には単なる狂信に感じられたかもしれないが，インドに生まれ育った Amir には彼の人生を方向づけるほど説得力があった：

> サグの中では，ヒンドゥー教徒もイスラム教徒も兄弟として結ばれる．彼らの中で誤った信仰をもつ者はいない．我々の信仰が祝福されたものであり，神聖な力に認められているのは確かに証明されている… どこへ行っても同じ兄弟愛に出会える．多くの場所でその実践方法や性質に違いは多分あるだろうが，サグの心は同一で，同じ精神でサグ行為の偉大な目的を追求する．我々はどこへ行こうと戸の開かれる家があり，ヒンドスタンの出身の自分たちが知らない言葉を喋る民族の間にあっても歓迎の言葉を受ける．最も言葉が違ってもお互いにサグであることを確認しあう符丁は我々と同じだが.[9] おまえに必要なのは，私がかつてしたように，彼らの中に飛び込んで，私の信念が真実であることを経験することだけだ．これが神の助けなしにできるだろうか．私たちの国の状態はひどく荒廃しているので，神の意志がなくてはそんな気持ちにならないことを認める．最初にその仕事をするときにはいくらか嫌悪感を覚えるだろうが，差し出される報酬があまりにもすばらしいので，それを得るために採る手段について瞬時も思い悩むことなく，そんな感情を克服できる．それにサグになることは，宿命だ．聖なる Allah の神の御心だ．誰がその思し召しに逆らえるというのか．(33-34)

Amir が異教徒の神に仕えることを Allah の意志とみなしたかどうかは定かでないが，「兄弟愛」という言葉に心を動かされた彼は，サグの一員になることを承諾する．そして，入団の儀式を済ませた後，「仕事」を覚えるために養父ら135人の仲間と共に集結地点のシェオプールからナグプール方面へ旅立つ．そして数日後，野営地に選んだグネッシャプール郊外で彼はサグの仕事ぶりを見学するように命じられる．犠牲者として選ばれたのは，追いはぎから身を守るために彼らと同宿するように誘い込まれたナグプールの書記一行9人で，その中には Amir と同じ年くらいの少年や書記の二人の妻，老女も含まれていた．歓迎の宴の席で彼らの目前に迫った死にいたたまれなくなった Amir は，テントの外へ逃げ出すが養父に連れ戻され，罪のない一行がすきに付け込まれて絞殺され，近くに用意された墓穴に放り込まれるのを

8) 荒　松雄『ヒンドゥー教とイスラム教――南アジア史における宗教と社会――』(岩波書店　1977年)，142-62参照.

9) サグは，お互いに仲間であることを確認したり，「仕事」をするために‘ *Ramasi* ’と呼ばれる隠語を使った.

目撃させられる．Ismailが予告したように，その残虐な場面は彼の脳裏に焼き付き，その夜彼は不眠に悩まされる．そんな弱気になった彼の様子を見た養父は，Amirが自ら率先して旅人を手がける神力を授かるようにと仕事始めの儀式として口にする砂糖の一片（*goor*）をAmirに食べさせる．そんなものにハシーシュのような魔力があるのか，あるいはAmirを後に取り調べるイギリスの官憲が述べるように，「判断力のつき始める頃から徹底的に吹き込まれた宿命論から行動を起こした」(211) のであろうか，彼は迷うことなくIsmailが薦めるヒンドゥーのサグの師匠（guru），Roop Singhのもとへ弟子入りする決心をする．

IV

Roop Singhのもとでサグ術を教え込まれたAmirは，再びIsmailらの旅に同行し間もなくナグプールで仲間が誘い込んだ商人を「初の試練」として手にかけるように命令される．初めて人を手がけるとなればだれしも怯みそうなものの，どこからともなく聞こえるロバのいななきをKali神によるお告げと信じ込まされた彼は，罪の意識もなく「初の試練」をくぐり抜けるばかりか，サグの絞殺役‘ *bhuttote* ’としての自らの実力を認識して感動する有り様であった：

> 布が彼の首に巻き付いたと思うが早いか，私は超人的な力を与えられたかのように，彼の首をねじり回した．しばらく彼は発作的にもがいたが，倒れた… 私の血は煮えたぎり，興奮で気も狂わんばかりであった．現実がそうであったように，たやすく百人もの他の人間を絞殺したかのように感じられた．私の手首のひとひねりが何年もその稼業に従事してきた人々と同列に自分を置いたのだ…（61-62）

初仕事に成功して一人前のサグとしてIsmailらに認められたAmirは，その後仲間と共にデカン地方の街道すじでカモにした旅人を次々に暗殺しては所持品を奪い，相当な富を蓄える．人目につく集団で行動するにもかかわらず，彼らが捕まらなかったのは，組織化されたサグの手口が巧妙であったからばかりではなく，インド各地で戦乱の絶えなかった時世にあって，Ismailらのように戦場を往復する兵士になりすませば，身の安全を図る旅人の信頼を得やすかった故でもある．特に教養も高く機知に富んだ会話の得意なAmirは，行く先々の為政者にも好感をもたれ，Mohammedの血をひくサイード（Syed）として信頼された．そのために略奪した金品や小切手の現金化によって身元を疑われることもなかった．

いかに神がかり的とはいえ，Amirのサグとしての活躍ぶりは，彼に犯罪者としての素質があることを思わせるが，意外にも彼は村の中では，養父と同様に人並以上の家族や隣人に尽くす人格者として慕われていた．それは決して彼が善人の仮面をかぶっていたのではなく，人並以上に立派に生活できる知性や感情が彼にそなわっていることを語っている．例えば，Amirが人妻であったAzimaを駆け落ちまでして自分の妻にしたのは，老夫に虐待される彼女に同情したからで，財産目当てではない．夫がサグであることに長年気付かなかった妻のAzimaにとって，Amirは彼女を絶望の淵から救った恩人であり，良き人生の伴侶であった．Amirにしても，妻や子供たちはかけがえのない存在で，一人息子や養父の死，家族との別離の際の彼の絶望した様子は家族に対する愛情の深さを表しているように思われる．ことに犯罪を暴かれて村を追放された彼が，母親も失ってイスラム学者に引き取られた一人娘を最後に一目垣間見ようとする様子は哀れで，サグとしての道を歩む羽目になってしまったAmirの運命には同情を禁じ得ない．

Amirが根っからの極悪人ではないことは，彼がChituの率いるピンダーリーの仲間に加わっても，女や子供を見境なく殺害したり，民家に放火するような非道からできるだけ身を引くことからも理解される．なるほど彼は，巧みな話術でアム

ラーオティやナンデールの住民から金を巻き上げるが，その一部をChituらに献納することで民衆をピンダーリーの暴力から守る．またブラーミンの娘に暴行を加えるChituの側近のGhaffur Khanの悪業は彼の目に余り，何とか少女を助けようと刀を抜きかけたりもする．金品ばかりではなく遊び相手の女も選ぶようにピンダーリーの仲間から誘われても，Amirに言わせれば，「サグは野蛮人ではなく，狼藉に加わるのは好まない」(258）のである．そもそもAmirが数名の手下と共にChituの配下になったのは，養父や妻子の住むジャラウンのラージャ（Rajah）から目こぼしを条件に多額の賄賂を要求されたためであり，ピンダーリー行脚は彼の性分に合わなかった．しかし，彼はそれ相当の富を得るまでは，妻子のもとに帰ることもできず，Chituの手足として略奪のための遠征に同行せざるをえなかった．

幼い子供を平然と手がけるGaneshaのような人間はともかく，Amirが道中で遭遇する様々なエピソードの中には，サグの中にも改悛の情に駆られて転向する例のあることを物語っている．例えば，Surfuraz Khanというサグはアカルプールからジャバルプールへ向かう途中で，Amirらと共に老兵士を襲うが，召使いの若い奴隷女を不憫に思いその命を奪わずに旅の道連れにする．しかし主人思いの彼女はSurfurazらの非道を罵って泣きやまない．彼女の口から自分たちの悪事が道中で暴かれるのを懸念した彼は仕方なく彼女を殺害する．それまでに何百人もの男女を手がけてきたにもかかわらず，命がけで主人を葬ったサグを非難する奴隷女の声は，Surfurazに残っていた良心を揺さぶったのであろうか．彼はその後「別の人間」(208）になったように意気消沈し，とうとう出家の意志を固めて全身に灰をかぶり，仲間に別れを告げる．そして彼女を殺害した現場に舞い戻って，そこに小屋を建てて隠遁生活を送る．また彼のように極端ではないが，Amirとピンダーリー行脚にも加わったPer Khanは養子にした幼い甥が，偶然彼らの犯罪を目撃したショックで亡くなったことに衝撃を受け，サグを続ける気持ちを失う．長年恐ろしい犯罪に平然と手を染めつつも，唯一の宝であった甥の死は「この先この子なしにどうしよう」(288）とつぶやくほどPer Khanを落胆させる．またAmirをはじめとするサグの仲間たちも，その少年がショックで落馬した際には旅人の遺体の処理も放り出して介抱に専念するほど，彼をアイドルとして可愛がっていた．サグから引退したい意志を告げるPer Khanの言葉はAmirの同情をかうが，彼は故郷に帰って間もなく予感通りに他界してしまう：

> 私はもうかつての自分ではない．二度と元に戻ることはできないだろう．すっかり精気を失ってしまったので，もう今までの自分の仕事には向かない．運命も私にサグ稼業に背を向けさせる．この恐ろしい破局の後で，私はもうあなたの役には立たないに違いない．だからどうか去ることを許してもらいたい．私は故郷に帰り，孤独に余生をAllahの神に受け入れられるものにするよう努力する．神がこの災いと共に私のもとに来られた．土が私にかぶせられるのも遠い将来ではない．この打撃は私を揺さぶり，私を墓に引きずっていくだろう．（288）

V

SarfurazやPer Khanのように良心に目覚めて転向したサグは，実際に存在したようであるが，一般的にはCharles Trevelyanが指摘しているように，[10] 一度‘ *goor* ’を口にしたサグの多くは，生涯その稼業に関与したと言われている．その典型的な例を示すかのようにAmirは，最終的にイギリス当局に捕らえられるまで，犯罪者として烙印を押されたり，牢獄に何年も繋がれてもサグから身を引かなかった．しかしそれは，単に彼がサ

10) Trevelyan, *op. cit*., 206.

グとしての功名心を捨て切れなかったからばかりではなく，生活手段や生きがいを奪われて他に採るべき道を見つけられなかったことや，自らの呪われた運命に対する復讐心のためでもあった．ジャラウンでの家族との生活のみが，まっとうな人生であったAmirにとって，彼を裏切って一家を破滅に追い込んだのが，こともあろうにサグを庇護してきたラージャであることは許せなかった．村に住むサグに多額の賄賂や勤労奉仕を強要しながら，イギリス当局との暗黙の取引きによって，ラージャは彼らを断罪してその財産や地位を取り上げるばかりではなく，罪のない家族まで路頭に迷わせる．処刑こそ免れたものの，家族との仲を引き裂かれて身一つで追放されたAmirは，ラージャの仕打ちを呪いこそすれ，自らの罪を反省して善人に生まれ変わろうとするはずもなかった．それどころか彼は養父を野蛮な方法で処刑されたり，罪のない妻が路頭に迷って死に追いやられたことを恨む．そんな彼には，サグとして再び暗躍することが，唯一の生き延びる道でもあり，彼を不幸に追いやった世間に対する復讐に思えた．放浪中に仲間と合流した彼は，北インドで再び悪業を開始する．しかし間もなくラックナウ付近で二度目の捕縛の憂き目にあい，脱獄を企てたことも災いして劣悪な環境の投獄生活を強いられる．そこで初めて彼は仲間の口から自らの出生の秘密や実の両親がIsmailやGaneshaらに暗殺されたことを知らされ，彼自身がアクレラで知らずして実の妹を手にかけてしまったことに気付いて驚愕する．彼にとってサグの流儀で葬る旅人たちはKali神に捧げた人身御供と見なすことができても，血の繋った妹を絞殺するのはサグの掟にも反すれば，Allahの神が許すはずもない悪行に他ならなかった．思い出してみると，彼は病気がちの娘のお守り用に，彼女の首にかかっていたコインのペンダントが欲しかったのである．ただそれだけのことで，養父が戒めた婦女の暗殺に手を染めてしまった．しかもそのコインこそ皮肉なことに，幼い頃彼が実の両親との旅の道中から彼女に送った兄妹の絆の証であった．いかに運命のいたずらとはいえ，彼はそれからしばらく夢をみるのが恐くて夜も眠れぬほど罪の意識にさいなまれたことを，後にイギリスの官憲に告白する：

> …他でもないあの古い価値のないコインのために彼女を殺してしまったことを，はっきりと思い出した．すべては紛れもない私の罪の証拠だった．その確信を追い払おうとしても，それは私の魂に入り込んで，そこに住みついた．Allahの神よ，私をお助け下さい．私はあわれな人間だ．髪には白髪が混じり，体はやつれて力がなくなった… 何か月も毎晩，後悔と苦悩で粗末な寝床の上でころげ回るか，座って体を揺さぶっていた．私の人生においてどんな行いも――あの行為を除いては――私に対する審判として立ちはだかることはなかった．私は他のことを考えようとさえしたが，それは心に浮かんでもすぐに消え去ってしまった．妹がいつも私の前に現れた．(345)

獄中で人生に絶望したAmirを支えたのは，どこかに嫁いでいった一人娘の面影であった．12年目にやっと釈放された彼は，まっ先に娘を引き取ってくれたジャラウンの回教学者の家を訪れるが，そこで彼女が結婚してどこかへ行ってしまったことを知る．しかたなく近くに住むかつて面倒をみた托鉢僧のもとにしばらく身を寄せるが，彼はつらい思い出のある町で物乞いをする生活に耐えられず，サグの仲間を求めて旅立つ．そして道中で出会った若いサグの長や昔の仲間と合流してShindhia家の領土やNizam領を荒らしまわり，彼の悪名は再びインド各地に轟く．しかしその頃既にイギリス当局は領土内のサグ対策に本格的に取り組み始め，Amirの首にも500ルピーの懸賞金をかけて，彼の行方を追跡中だった．長い間，不遇であった彼はそれを知っても身を隠すどころか，お尋ね者のサグになったことを誇り，大胆にもイギリス支配下のカルカッタ遠征を企てるが，その道中で二人の仲間の裏切りにより，サーガルの治安当局に差し出され身柄を拘束される．そこで彼は過去に犯した罪のほとんどを，仲間の証言によ

って暴かれ，極刑を覚悟するが，意外にも減刑を条件に仲間の逮捕に協力する‘ approver ’となることを勧められる．なるほどAmirにとって，仲間を告発することは，サグとして即座に処刑されるよりも恥ずべき裏切り行為に思われた．しかし，犯罪者として観衆の嘲笑の中で「犬のような最期」を遂げるのも彼の望むところではなかった：

> …私は自分の運命を深く考えた．私は死ぬ運命にある．それは決められたことだ．私は死を恐れただろうか．最初は恐れなかった．死への旅を永遠の喜び，天国へ，父とAzimaのもとへ導いてくれるものだと見なした．しかし私は何度も考えているうちに，別の思いで心が一杯になった．私は死ぬことになっているが，どうやって死ぬのか．一人の男や軍人としてではなく，多くの人々によって死の苦しみでもがくのを軽蔑して見られる惨めな強盗としてだ… 一方に生があった．それが一種の隷属であるのは事実だ．しかしそれでも生きていることに変わりはなかった．私は保護されるだろう．ヨーロッパ人が私を不憫に思ったら，ひょっとしてもう一度自由の身になれるかもしれない．それで私は彼らに忠実に奉仕した．(358)

惨めな強盗としての死を避けるために，‘ approver ’となることを申し出た Amirは，実母を殺害して彼も手にかけようとしたGaneshaをまっ先に告発する．凶悪なサグとして彼を追跡していたイギリス当局は，Amirに6人の官憲をつけてサーガル付近で村長にかくまわれていた彼と相棒のHimmelをおびき出させて，二人の捕縛に成功する．Ganeshaが罵るように，AmirはKali神の冒瀆者になったものの，彼に対する積年の恨みを晴らすと共に，極刑を免れる．その後も多くのサグがAmirの協力によって捕らえられ，彼らによる犯罪は減っていった．しかし，「千回の死に値する」罪を犯したサグの彼は，早々に釈放されるはずもなく，退屈な囚われ生活を送り続ける．そんな彼の唯一の慰めは，サグとしての過去の栄光と，娘の存在を思い起こすことであった．

VI

Amir Aliの‘ approver ’への転向はしばしば，サグを弾圧するイギリスの支配者がKali神にも勝る力をもち，インド人を迷妄の世界から引き上げる役割を担う存在であることを示唆するものとして解釈される．確かにこのような物語の顚末は，Patrick Brantlingerが指摘するように，[11] ヒンドゥー教文明に対するキリスト教文明の優位を印象づけるばかりではなく，功利主義的な改革志向や福音主義の煽りを受けつつあったヴィクトリア朝初頭の読者層に，インドに対するイギリスの使命を再認識させたに違いない．彼らにとっては，サグにまつわるインドの後進性が強調されればされるほど，原住民を未開な状態から救い上げようとするイギリスの支配はより正当なものに感じられたであろう．実際にサグの存在を知った政治家のCharles Trevelyanは，インド人にイギリスの文化と科学を学ばせて，インドの再生をはかろうと唱えた．彼の説によれば，サグを生み出すヒンドゥー教こそが，インド人を迷信や呪術に縛り付け無知蒙昧な状態に沈める元凶であり，彼らを救う唯一の方法は，キリスト教文明の光の導入であるという：

> ここに平和や幸福ではなく人間の破滅を促進する一つの宗教の特異な光景がある．他の宗教にも悪弊はあるが，[Kali] の宗教の本質は正に紛れのない悪である．彼女が殺人のシステムを統括し，人類の半数がある特殊な処方で

11) Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914* (Ithaca : Cornell University Press, 1988), 89.

彼女の信者のサグによって絞殺されるのを認めたと考えられている… およそすべての偽りの宗教は人類の邪悪な情念をくすぐる．しかしギリシアやカルタゴ，スカンジナビアにおいて，現時点のインドほど迷信が道徳心と正反対の位置を占めていたことがかつてあっただろうか．もし宗教を測る物差しを作るなら，キリスト教と［Kali］信仰は対極をなすだろう…
　我々は自信をもって，英文学やイギリスの科学，道徳観念をインドの大衆に徐々に浸透させたらインドを近い将来，再生させるに違いないと期待してはいけないだろうか.[12]

Trevelyan らが唱道するインドの欧化政策は，自由主義思想の流れを汲むもので，1830 年代においては，インドの宗教や慣習を温存しようというする保守的な政策に代わりつつあった．言語の問題にしてもミッション・スクールで教えられる英語は，東洋学者が重宝していた法廷用語のペルシア語を廃して，公用語とされ，インド人の西洋化のための重要な媒体となり始めた．宗教的な問題については，従来東インド会社は干渉しない方針をとっていたが，Bentinck がベンガル総督に着任して以来，それまで黙認されがちであったサティー（寡婦の殉死）も違法とされ，取り締まられるようになった．そのような風潮にあってイギリスの制度に基づくインド統治を促進しようとする人々にとって，*Confessions of a Thug* に描き出されるサグの問題は，彼らの方針を提唱するための格好の論拠となったに違いない．しかし，そのストーリーの展開からは，単なるイギリス当局の治安維持がインドの抱える様々な社会問題を解決しているような印象を受けない．またインドの自然や風土を詳細に描き出す作者が，ヒンドゥーやイスラムの文化のすべてを劣等なものとしてインドの欧化政策に諸手を挙げて賛同したとも思われない．なるほど主人公の Amir Ali は，最終的にサグの世界から隔離され，イギリスの官憲の僕となるが，サグの不滅を主張し，自らの過去の栄光を誇る有り様で，彼の内面に変化は感じられない．彼が捜査に協力するのは，サグ行為を犯罪と見なして過去の罪を悔やんだからでもキリスト教道徳に目覚めた故でもなく，あくまでも自分の身を守るためであった．また一方，彼は罪のない旅人を殺害した犯罪者ではあっても決して無知蒙昧な野蛮人ではなく，彼を取り調べるイギリスの官憲にさえ，「牢番の目からも尊敬すべき人物に映る」(211) 文明人として評されている．そんな彼のサグ行為がことさら強調されているのは，宗教的誤謬に陥ったインド人の蛮性を強調するためというよりは，「殺人が大衆娯楽，つまり見るスポーツとして制度化された」ヴィクトリア朝初期の人々の趣向に合わせたからではないだろうか．出版当時ニューゲート・ノヴェルが流行していた事実を考慮すると，この小説が描く「殺人の中に，［読者］は恐怖，病的な共感，自分に代わって表現された攻撃性など根源的な情念の捌け口」を見いだしたに違いない.[13] それ故に *Confessions of a Thug* は同作家が後に執筆したマラータ戦争やマイソール戦争を取り扱った歴史小説，*Tippoo Sultan*（1840）や *Tara*（1863）よりも大衆に人気を博したのであろう．すなわちイギリス人が正義の代行者として，凶悪なサグを一網打尽にして罰するという勧善懲悪的な物語の筋立ては，本国で起きる犯罪に興奮を覚えたヴィクトリア朝の大衆やインドの植民地化を強行する支配層にとって，いわば一種のカタルシスとなったように思われる．物語の冒頭でサグの絶滅を Amir に宣言する官憲の言葉はインドの治安に貢献するイギリス人の努力とインド統治に対する自信の表明として本国の読者に歓迎されたに違いない：

古くから伝わる君たちのサグ稼業は，相変わらず繁栄しているように見えるが続けることはできない．人間は野生の動物のように追い

12)　Trevelyan, *op., cit*., 196.
13)　Richard D. Altick 著，村田靖子訳，『ヴィクトリア朝の緋色の研究』（国書刊行会，1988），15.

つめられ，捕らえられたら絞首刑にされるか，多くのサグにはもっと都合の悪いことに島流しになる危険に身をさらすのに疲れてしまうだろう．インド政庁はサグがいるとわかれば必死になって追いかけるので，インドで君たちの仕事ができる場所はどこにもなくなるだろう．（15）

この言葉通り，サグは1860年までにほとんど一掃されたと言われるが，[14] 物語の中では，サグに寄生して私腹を肥やすジャラウンのラージャの悪事は摘発されずに野放しにされたままである．行政を司る立場にありながら，主人公らを庇護するポーズをとりつつ搾取し，挙げ句の果てには，罪のないその妻子を路頭に迷わす彼こそは，サグよりも極悪非道でインドの社会問題の元凶ともいえよう．しかしその複雑な行政機構や社会慣習のために彼が犯すような犯罪は，イギリス当局の取締りの対象にはなりにくかった．それは，長年インドに滞在し様々な原住民と直接交流のあった作者の認識するところであった．すなわちインドの複雑な社会構造や，宗教的な問題を理解しなければ，インド人の救済や向上は達成されるはずもなく，単なるイギリスの制度や文化の移植に作者は疑問を投げかけたのである．特にセポイの反乱を取り扱った彼の作品，*Seeta*（1872）の中では，インドの宗教や文化の正しい認識の上に築くべき英印関係の模索がテーマとされ，欧化政策が推進される年代にあって，作者はインドに対して極めて保守的なアプローチをとったことが理解される．Taylorが*Confessions of a Thug*の出版にあたって，読者に期待したのは，主人公らが犯罪を犯すようになった社会的，宗教的背景を理解することであり，彼らをインド人故に無知蒙昧な野蛮人として蔑視したり，盲目的なインドの欧化政策に共鳴することではなかったのではないだろうか．

おわりに

Kali神を崇拝する暗殺教団員サグを題材にした小説，*Confessions of a Thug*は，原住民の宗教や社会の不定的側面を描いた作品で，イギリスのインド統治の妥当性をヴィクトリア朝初期の読者に印象づけた．外国に舞台があるとはいえ，その物語の展開からは，当時のイギリスのニューゲート小説と同様，犯罪や社会改革問題を考えさせられたに違いない．化学兵器も世界戦争も知らなかった時代にあって，無差別に旅人を暗殺するサグの存在するインドは，ヨーロッパの中世にも劣るような低迷状態にあり，彼らを一掃するイギリス人が文明の使徒に感じられたのも不思議ではなかったのであろう．しかし*Confessions of a Thug*を批評するにあたっては，この小説が，Kiplingの作品に先行するアングロ・インド小説の中で，インドの文化や歴史を詳細に描き，原住民を円球人物的な性格をもつ主人公として描いた初の作品であることを忘れてはならない．[15] James Millをはじめとする自由主義者がヒンドゥーやイスラム文化を考慮する価値のないものとしてインドの欧化政策を提唱する時世にあって，Taylorは両信徒が抱える問題を深く追求した．その偏見のないインドへのアプローチは，彼が東インド会社に直接関わりのない一人のイギリス人としてインドに人生の最盛期の40年間を捧げた結果から生まれたのであろう．

14) Brian Rawson, *op. cit*., 10.

15) Susan Howeは，Taylorを「インドの重要問題を初めて取り扱った歴史小説家」と評している．Susan Howe, *Novels of Empire* (rpt., 1949, New York : Kraus Co., 1971), 63.